

多文化共生を再考する：

『多言語アイデンティティを肯定できるコミュニティに向けて¹⁾』

Rethinking Multicultural 'Kyosei' in Japan:

Towards a Community which Accommodates Multilingual Identities

1. 研究経緯

本研究は、筆者の藤田ラウンドが国際基督教大学教育研究所の研究者として、2012年度から科学研究費助成を受けたプロジェクトであり、2012年から国際基督教大学内で、また、2013年度からは筆者の本務校となった立教大学大学院と国際基督教大学の両校で研究を遂行している。2014年度はプロジェクトの最終年度である。

本研究タイトルの「多文化共生を再考する」には、藤田ラウンドが2002年からフィールドとしている新宿区の具体的な多文化共生の状況を鑑みて、理念としての「多文化共生」と、多文化が混在している「現実」との乖離を問い直したいという問題意識が反映されている。従って、筆者の新宿区の外国につながる子どもの「第二言語としての日本語（JSL）」教育を切り口にした新宿区のバイリンガルの子どもたちとその言語教育や学習支援に関わる調査（藤田ラウンド、2008、2010）を研究の基盤として出発をした。

2. 2013年11月から2014年10月までの活動記録（それ以前については『教育研究56』参照）

2. 1 多文化共生という概念

理念としての「多文化共生」は、一枚岩ではない。様々な立場、それは学問領域であったり、または現場であったり、それぞれによって独自の文脈の中での解釈がなされているため、一つの静的な「論」として捉えることは難しい。同時に、日本社会の中の「多文化」という定義そのものも、揺らいでいるのではないだろうか。1990年の入国管理法改正に始まる「日系人」であるブラジルとペルーを中心とする、1990年当時のニューカマーである「日系人」の出身国の国籍人口の急増からすでに20年がたち、「多文化」の配分をオールドカマーとニューカマーといったそれまでの歴史を前提とした時間区分で区別することもそぐわなくなっている。加えて、この20年間の間には、世界に共通する2008年のリーマンショックによる経済活動の急激な変化、さらに2011年に日本でおきた東日本大震災以降の環境の変化など、移動をする人たちが引きつけられる「経済」そのものの変動があった。「多文化」を取り巻く人や家族、コミュニティが動的であるがゆえに、各々の解釈が生じるばかりか、さらに時間的再解釈も加わってくる。

また、多文化共生には、「多文化」と「共生」のどちらが強調されるのかによっても、「多文化共生」の軸が異なると考えることができる。「多文化」の側面が強調される場合は、多文化主義（multiculturalism）とも考えられる「文化」が複数、同等に並列したそのバランスや公正さ（equity）が問われ、「共生」が強調される場合は、生物学の共生（symbiosis）や「共に生きる」という行動（living together）、また「共に楽しむ」という行為（conviviality）など、「共生」の主体の行動や行為が範疇に入る。さらに、「多文化共生」の主体を描写するのではなく、客体として外側から眺めるのか（co-existence）、視点のポジションによっても異なる。現在、「多文化共生」の概念については、文献調査も行い、最終報告書にまとめている過程にある。

2. 2 「多文化共生を再考する」ためのシンポジウム

2012年度、2013年度を通じて、映像撮影、編集の技術習得のためのワークショップ、そして、多文化交流のためのウェブサイト構築を行った。こうした「動画」の技術、「発信」の技術を2014年度では特にシンポジウムの運営という点で、フルに活用することができた。ウェブサイト上で、シンポジウムの広報、申し込み、シンポジウム直後の報告、講演の動画が視聴²⁾できるようにした。

シンポジウムのプログラムは、以下のとおりである。

二回連続シンポジウム 「多文化共生を再考する ―― 学際的な視点から」

日 時：2014年9月7日・14日

場 所：国際基督教大学，東ヶ崎潔記念ダイアログハウス2階国際会議場

主 催：平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業・基盤研究（C）研究課題番号：24520586「多文化共生を再考する：多言語アイデンティティを肯定できるコミュニティに向けて」（代表：藤田ラウンド幸世）

後 援：国際基督教大学教育研究所

<第一日目：9月7日> 異文化と第二言語を軸に子ども期のアイデンティティを問い直す

箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）

善元幸夫（元新宿区大久保小学校日本語国際学級教員，琉球大学・東京学芸大学他兼任講師）

<第二日目：9月14日> 歴史と時間を軸に多文化・多言語のあり方を問い直す

中牧弘允（吹田市立博物館館長，国立民族学博物館名誉教授）

John C. Maher（国際基督教大学，国際基督教大学教育研究所所長）

2. 3 フィールドワーク調査研究

(1) 沖縄県宮古島市での調査（研究協力者：善元幸夫，他）

2014年2月 宮古島市の教員用講演会とフィールドワーク調査

2014年7月 宮古島市の中学校での出前授業，インタビュー調査，フィールドワーク調査

(2) カトリック教会でのスペイン語母語教室（研究協力者：Maria Dolores Pérez Murillo, Ph.D.）

2014年10月現在，アクション・リサーチが継続中

(3) 中南米における日系移住地での日本語教育（研究協力者6名）

2014年10月現在，ウェブサイト上で現地報告が継続中（<http://multilingually.jp>）

(4) 新宿区でバイリンガルとなった子どもの追跡調査

2014年11月 韓国，京畿道・ソウル特別市にて アクションリサーチ・インタビュー調査

3. 終わりに

今年度は、「多文化共生」の理念の，流動性と定説として扱う難しさを乗り越えるためにシンポジウムを企画した。講演者の協力を得て，子ども期に異文化体験を通して身につける意味空間とアイデンティティ，新宿区で日本語を第二言語として学ぶ子どもたちのアイデンティティ，またカレンダーという文化が反映された「時間」，歴史の中で解釈されてきた多文化共生，このような新たな視点で「多文化共生」を多面的に問い直す機会を得ることになった。シンポジウムでは，講演者とのディスカッションも行い，その議論や対話から，また新たな視座が拓かれたように思われる。

3年間のプロジェクトの最終年度にあたり，2.1で挙げた「多文化共生」の概念について，また，2.3で挙げたフィールドワーク調査，アクション・リサーチをまとめる作業が残っている。副タイトルの「多言語アイデンティティを肯定できるコミュニティに向けて」の課題においては，今後も継続して取り組むつもりである。

Live Multilingually: <http://multilingually.jp>

注

1. 平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業，基盤研究（C）研究課題番号：24520586

2. シンポジウムの講演の動画の視聴は，<http://multilingually.jp>からyoutubeのボタンを押すことで視聴が可能となる。

3. 所属：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

藤田ラウンド 幸世³
FUJITA-ROUND, Sachiyo